迫害下のフランス改革派教会の歩み*（一）
—ナント勅令の発布から廃止へ—

森　川　　甫

Ⅰ．ナント勅令の発布

アンリ４世[1]は、苦しみながらも、家臣は王の宗教を信奉しなければならないと思われていた時代に、カトリック教会と改革派教会の２つの信仰告白の共存を樹立した。このことのために、彼は命をかけて努力したと言えるであろう。なぜなら、彼に対して12回の暗殺の企てが失敗しており、13回目に暗殺されているからである。

アンリ４世はイスパニア国王、フィリッペ２世から彼の王国を取り戻すために戦い、30年間の戦争のすえ、1593年５月２日、ヴェルヴァン条約の締結に至った。彼は半ば破壊された国を再建し、疲弊した財政を再建しなければならなかった。彼は、もはやひとつの教会というよりも、ひとつの党である少数派、つまり、ユグノー党と長い交渉を持たなければならなかった。アンリ４世の改宗は、この党にとってどんなに打撃であっただろうか？交渉は極めて難しく、結論を得るには忍耐、巧妙さ、おそらくは、策略が必要であった。アンリ４世は、この交渉を４つの段階ですすめた。95の一般条項は1598年４月13日に、礼拝に関する57の秘密条項は５月２日に、牧師の給与支払いに関する勅許状は４月13日に、安全保障地域に関する秘密条項は４月30日に署名された。そして、議会は「ナント勅令」と呼ばれるこの勅令に制限を加えることになる[2]。

E-G. レオナールは幾つかの理由によって、この勅令がプロテスタント教会を「不利な宗教団体にし、しかし、特権を与えられた社会、政治団体とした。」と評している[3]。実際、この勅令はユグノーたちに対して「パリと宮廷の所在地では、あらゆる礼拝を拒否した」が、行政管区ごとに２ヶ所ずつの場所および貴族の城館と1596年から1597年にかけて礼拝の自由が認められていた市町村において礼拝の自由が認可された。改革派に関する書物は、礼拝が公に認められている都市や土地でのみ、印刷したり、販売することが許可された。このような制限の下で、この勅令は、教会堂を建てたり、墓地を特別に造成することを認めた。牧師たちにあらゆる都市に滞在し、病院や刑務所の病人を訪問することを許可した。プロテスタントは売買したり、遺贈したり、相続したり、牧師の前で結婚したり、彼らの子供の宗教を選ぶ権利を持っていた。彼らは国家の補助を受けて、学校を建設することができ、また、子供たちは大学に入ることも許された。プロテスタントはあらゆる公職につくことが許されていた。しかしながら、ローマ教会によって規定されている祝日を守り、十分の一税を納めなければならなかった[4]。

このように、プロテスタントにとっては、礼拝の自由はかなり制限されていた、逆に、この少数派は、モンペリエ、モントーバン、ラ・ロシェルのような要塞となっていた約百の安全保障地域を８年間、維持することが認められていた。国家はこれらの要塞の維持、守備隊への給料支払い、牧師に対する給料の支払いを保証した。全国教会会

*キーワード：二つの信仰告白、プロテスタント、カトリック

1）Henri de Navarre（1553-1610）、プロテスタントの王、1594年、カトリックに改宗してフランス国王となり、アンリ４世を名乗る。

2）Cf. Raoul STEPHAN, *Histoire du Protestantisme français*, 1961, cf. p. 139.

3）Emile-G. LEONARD, *Le Protestantisme français*, p. 32.

4）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 140.

議（大会）のほかに、議会を維持するもでき、宮廷へは代表団を派遣した[5]。

実際には、勅令は誰をも満足させなかった。ユグノーたちは疑い深く、不安を抱き、王がますます、彼の新しい宗教、カトリックに傾くのではないかと懸念していた。子供攫い、投石、墓地発掘など、ユグノーを侮辱する痛ましい行為が続いた。1595年、ラ・シャテニェ、ヴァンデで礼拝をしていた2百人のユグノーが虐殺された[6]。

カトリック教徒たちはさらに怒り狂っていた。教皇クレマン8世[7]は「それは私を十字架にかける。」と述べて、信仰の自由は「世界でもっとも悪いもの」であると言った。フランスの聖職者たちは、教皇の意向にしたがった。議会は「ナント勅令」を批准するのを妨げた。ルアンの議会が譲歩して、批准したのはやっと1609年のことである。国内をまとめるにはあらゆる粘り強さ、あらゆる王権の威厳が必要であった。プロテスタントは、宗教戦争、迫害、殺害ののち、125万人、915の教会堂、8百名の牧師に減じていた。国王の影響下、知識階級は双方の理解に努めたが、民衆は聖職者たちに唆されて、ユグノーに対して、激しい恨みを抱いていた。最も痛ましい行為は、プロテスタントが墓地を持っていない土地での死体の発掘であろう。しかしながら、プロテスタントの歴史家たちは国王の暗殺までの12年間が、フランス改革派にとって最も平静な時期であったと指摘している。妹、カトリーヌ・ド・ブルボンが幼児からの信仰に忠実にとどまり、母親のジャンヌ・ダルブレから受け継いだユグノーの敬虔さを兄に思い起こしていたので、国王は「ナント勅令」を誠心誠意適用するように努めた[8]。

17世紀初頭は熱心にカトリックの復興がなされた時期である。ベリュール神父[9]、サン・ピエール・フーリエ[10]、サン・フランソワ・ド・サル[11]、サント・ジャンヌ・ド・シャンタル[12]、メール・アンジェリック[13]、コトン神父[14]らが、輝かしい光を放っており、修道院が改革された。アンジェリック院長がポール・ロワイヤル修道院を改革し、大きな信仰運動を起こした。アカリ夫人はパリのユダヤ人街にカルメル会を開き、その信仰復興運動はフランス国内に広がっていった。1610年に『カトリック綱要』を出版することになるイエズス会のコトン神父は王の聴聞司祭に任命された。王の耳の中にはコトンがいると、王の昔の友人たちは揶揄した。国王は、3年毎に開催し、勅令の違反を抗議していたユグノー議会の声を聴こうとしなかった。

デュプレシ・モルネは1598年、『聖餐式と旧教会』[15]を出版し、この論説の中で、彼は、聖書や教父、神学者の著作から5千ヵ所の引用をして、ミサとカトリックの制度の大部分の起源は原始キリスト教にまではさかのぼらないことを示した。ソルボンヌ神学部が彼の主張を非難した。国王はかつての友である彼を譴責した。デュプレシ・モルネは国王の前で1600年5月4日、デュ・ペロン司教と論争した。1603年、シャミエ牧師[16]が議長となって開催されたガップの教会会議（大会）は、信仰告白の中で、教皇は「まさに反キリストであり、また、聖書に預言されている滅びの子である。」と規定したので、国王の怒りに触れた。1607年に開催されたラ・ロシェルの教会会議（大会）は教皇を侮辱するこの条項を信仰告白から削除している。

このような論争の雰囲気は、2つの教会の間の平和を強めるのに適切ではなかった。国王はシャ

5）Cf. *Ibid.*, p. 140.
6）Cf. *Ibid.*, p. 141.
7）Clément Ⅷ（1536–1605）第229代教皇（1592–1605）
8）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 141. Catherine de Bourbon（1558–1604), Jeanne d'Albret ナヴァールの王妃.
9）Pierre de Béllule（1575–1629）枢機卿。
10）Saint Pierre Fourier（1565–1640）司祭。
11）Saint François de Sales（1567–1622）カトリックの神秘家。
12）Sainte Jeanne de Chantal（1572–1641）カトリックの聖女。女子サレジオ修道会を創設。
13）Mère Angélique（1591–1661）ポール・ロワイヤル女子修道院長。
14）Le Père Pierre Cotton（1564–1626）国王の聴聞司祭、イエズス会士。
15）Duplessis-Mornay（1549–1623）プロテスタントの指導者。*L'Eucharistie et l'Eglise ancienne*, 1598.
16）Daniel CHAMIER（1565–1621）

ミエの第1回訪問は歓迎しなかったが、2回目は、歓迎せざるをえなかった。国王には多くのプロテスタントの協力者がいたからである。その中には、シュリ、ラフマ、カネェ、ゴブラン、フランソワ・トロカ、オリヴィエ・ド・セールらがおり、また、1596年、モンペリエに有名な植物園を建設したリシェル・ド・ベルヴァル、建築家のアンドルエ・デュ・セルソ、画家のジャック・ブリュネル、彫刻家のギヨーム・デュプレ、バルテルミ・プリユール、音楽家のクロード2世、ケベックの開拓者ピエール・デュ・グアがいた[17]。

改革派教会の礼拝は951の教会で障害なく行われた。国王の国政会議はいつまでも教会会議の重要な陳情に無理解というわけではなかった。1606年、国王はパリのユグノーにシャラントンに教会堂を建てることを許可した[18]。しかし、幻想家、ラヴァイヤックは国王の誠意を疑い、1610年5月14日、アンリ4世を暗殺した。

国王の死はプロテスタントに大きなパニックを引き起こした。多くの家族はパリを離れ、シュリ公はバスチーユに閉じ篭もり、南フランスのユグノーは戦闘の準備をした。摂政となったマリ・ド・メディシス[19]は5月22日、宣言を出して、勅令を保証した。ただ、彼女を取り巻いているイタリア人たちの存在、彼女の新しい大臣の就任、シュリの解任はプロテスタントの心を静めるものではなかった。宮廷は、1611年5月27日、召集され、4ヶ月間続くことになるユグノーの議会の開催をしぶしぶ許可したが、この議会は王室の政治に対して強い敵意を表わし、また、スウビーズ公[20]が策動をやめなかった。結果は、「慎重派」が、ナント勅令の回復、安全保障地域の要塞の再建、守備隊への給料の全額支払い、牧師の給与の増額を要求する「確信派」に勝った。ユグノーの希望は、デュプレシ・モルネから、起こりうるかもしれない脅威に備えることをを主張するシュリの婿、若きロアン公に移った。しかしながら、ソミュールの議会は、当時まだ9才の若き王への忠誠の誓いをした。摂政の禁止命令にもかかわらず、ユグノーは政治的議会を続けた。ルイ13世とイスパニアのアンヌ・ドートリッシュ[21]の結婚の計画は、プロテスタントに決定的な不安を与えた。コンデは南フランスの3つの地方で、反乱を起こさせる。摂政はルーダン条約（1616年5月3日）によってそれを治めた。この条約は、安全保障地域を6年間、与えることを更新、次いで、彼を牢獄にいれた。ルイ13世は彼の母の相談役、コンチニ[22]を暗殺した。若き王はそのとき、首相として、アルベール・ド・リュイヌを登用し、ローマ教会の相談役に取りかこまれることになった。また、国王の聴聞司祭に、アルヌー神父を登用した。王は、聖処女への特別な信仰を持ち、とりわけ、1638年、ついにアンヌ・ドートリッシュ[23]に子供が生まれることを知った時、彼は感謝して、ノートル・ダム寺院に彼の王国を捧げた。

このような王が、危険な異端とみなしている人々に共感を抱いていないのは、驚くべきことではない。ルイ13世は、ジャンヌ・ダルブレの国の3分の2がユグノーだということを軽視しなかった父王、アンリ4世の意向を尊重しないで、ベアルン教会の財産をカトリックに返還することを計った。1620年に、彼はポーに入り、ナヴァールを奪取し、彼の軍隊がドラゴナードの痛ましい前味をプロテスタントに味わせている間に、この返還を要求した。ユグノーは、今回は、デュ・ムーラン[24]のような幾人かの牧師が絶えずすすめていた慎重さの勧めを聴き入れなかった。1620年12月25日、彼らは武器をとって立ち上がることを決議した。レディギエール[25]は宮廷に戻るために、改革派の立場を捨てた。モルネは戦闘を避けた。し

17）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 143.
18）パリの西南方郊外に位置した改革派教会の教会堂。デュ・ムーラン、ジャン・クロードらが牧師として活躍したが、1685年に破壊された。
19）Marie de Médicis（1573-1642）トスカナ大公の娘、フランス国王、アンリ4世と結婚。
20）Benjamin de Rohan Soubise（1583-1642）プロテスタントの貴族。
21）Anne d'Autriche（1601-1666）フランスの王妃、イスパニアのフィリップ3世の娘。1615年、ルイ13世と結婚。
22）Concini（1575-1617）イタリアの政治家。
23）Albert de Luyne（1578-1621）イタリア、トスカナ出身。
24）Du Moulin（1568-1658）
25）Lesdiguière（1543-1626）プロテスタントの貴族。

かし、アンリ・ド・ロアン[26]とラ・フォルス公爵[27]は国王軍と戦うことを決心した。その時、国王は、ユグノーの指導者、デュプレシ・モルネが王の約束を信用して門を開くと、入場した。彼はサン・ジャン・ダンジェリに行進し、21日間の包囲の末、これを奪取し、クレラックを捕らえたが、モントーバンの手前で失敗し、メエンヌは殺害された。国王の寵臣、リュイヌは慎重に判断し、ラ・フォルスと粘り強く交渉した。国王は1621年11月2日、しぶしぶ包囲を解いた。

パリでは、熱狂徒たちが、シャラントンの教会から帰って来るユグノーに復讐し、建物に放火した。リュイヌは1621年12月15日逝去した。翌年、スウビーズ公は、病弱で、子供のない国王の跡継ぎを夢見るコンデ王子に押されて、内戦を再開する。しかし、ルイ13世は彼の軍隊をブルターニュで破り、ロヤン、トナンまで、侵攻し、そこで、ユグノー軍のなかで、ポール・ド・ヴィオが負傷した。この国王軍の勝利は、プロテスタントの諸侯の勇気を挫き、彼らは降伏したが、アンリ・ド・ロアンは戦闘を続け、彼の兄弟はイギリスに亡命して、ジャック1世の支持を求めた。国王軍は南フランスに下り、ユグノーを虐殺した。次いで、王はモンペリエの攻撃しないで、交渉を望んだ。モンペリエの講和（1622年10月18日）はユグノー党に2つの安全保障地域しか残さなかった。1623年11月11日、信仰の自由のために戦い、2つの信仰の共存を夢見たデュプレシ・モルネが亡くなった。

マリ・メディシスは、1622年に枢機卿になった小貴族出身のアルマン・ド・リシュリュー[28]を登用した。彼の優れた政治能力が国王に認められた。彼は1624年、国王の国政会議に入り、間もなく、39才で、その議長となり、死ぬまで、(1642年)憎悪や陰謀の横行するなかで、ルイ13世の首相を努めた。彼はその政治感覚によって、ただちにオーストリア王室に敵対する立場をとり、対外政策ではコリニー[29]やアンリ4世が辿ったのと同じ道を歩むことになり、フランス国内では、カトリックの立場を護る政策をとった。

1626年2月5日、リシュリューはラ・ロシェルの講和条約に調印し、その交易の妨害をしないことを約束したが、ルイ要塞を破壊しないことは約束しなかった。この日から、ユグノーの首都を滅ぼすという彼の方針は決まっていた。外国の介入があっても、対抗できる十分な艦隊が得られると、彼はラ・ロシェルを海上包囲した。英雄的なこの都市は、食糧不足にもかかわらず、市長ジャン・ギットンの強力な指導によって、1627年10月から1628年10月まで1年間、抵抗したが、1628年10月28日、降伏した。人口2千5百から3千名を数えたこの都市は、もはや、骨と皮ばかりの千5百名と154名の守備隊しか残っていなかった。翌日、リシュリューは死体の横たわっているこの都市に勝利の入場をし、サン・ミシェル教会でミサを行なった。11月1日、国王は入場し、この都市のあらゆる特権を廃止し、城壁を取り壊し、教会の礼拝はカトリック様式に戻し、司教区を創設した。この勝利を祝うため、パリでは、ノートルダム・デ・ヴィクトワール教会が建てられた。[30]

アンリ・ド・ロアンは1629年1月、戦闘を再開する。ルイ13世自身が、サン・タンドレ・モンブランが必死で守るプリヴァを1629年5月14日から17日、攻撃した。この市は占領され、弾圧はきわめて厳しかった。国王軍はセヴェンヌ地方にも侵攻した。6月17日、アレスが降伏し、ニーム、モントーバン、カストロ、ミローと次々と荒らされた。リシュリューは、1629年6月28日、アレスで「恩恵勅令」をアンリ・ド・ロアンに与え、プロテスタントから最後の安全保障地域をも取り上げ、「ナント勅令」は宗教的、市民的寛容しか残さなかった。アンリ・ド・ロアンとその家族はスイスに亡命した[31]。

ルイ13世の治世末期とマザランの統治の時期は、比較的平静な時期だった。確かに、リシュリューは寛容政策を採ったが、「異端者」をカト

26) Henri de Rohan（1579–1638）フランスの将軍、プロテスタントの指導者。
27) Jacques Nompar La Force（1558–1652）フランスの元帥。プロテスタントの指導者。
28) Armand Jean de Plessis Richelieu（1585–1642）
29) Gaspard de COLIGNY,（1519–1575）フランスの提督。プロテスタントの指導者。
30) Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 147.
31) Cf. *Ibid.* p. 148.

リックに戻すことを努めた。ローマ教会は、伝道や論争など正当な手段も用いたが、しかし、カトリック教徒優遇、子攫い、プロテスタントの教会堂破壊、要するに過酷な手段もしばしば採られた。

プロテスタントとカトリックの交流が最も友好的に行なわれたのは、パリの社交界である。しかし、もはやユグノー党はなかった。守備軍がなく、国王と枢機卿の思いのままになる教会のみが残った。リシュリューの絶対主義は、大貴族の役割を宮廷貴族に減じ、ブルジョワには政治的関心を挫かせた。この絶対主義は、ルイ14世の治世に絶頂期に達し、やがて、ブルボン王朝に高価な報いを払わせることになる。[32]

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リシュリューの死後、6ヶ月、ルイ13世は、1643年5月14日、死亡した。その息子はまだ5才であった。新しい摂政は、マリ・ド・メディシスほど支離滅裂ではなかった。というのは、アンヌ・ドートリッシュ皇太后はリシュリューが見込んで、枢機卿に任命していた有能な人物マザラン[33]を信頼したからである。柔和さと謙虚さに満ちたこの人物は非常に巧妙に術策を弄したので、誰もが彼を自分の味方だと思っている間に、みんなの指導者になった。彼は国の内外政策において、リシュリューの事業を継承し、2つのフロンドの乱、議会のフロンドの乱と貴族のフロンドの乱に遭遇し、1661年3月8日に死ぬまで、王国の真の支配者であった。

ガリカニスムに傾斜する枢機卿は、寛容な姿勢を見せる。ラ・マレシャル元帥やシャチヨン元帥には特別な計らいをし、ユグノーたちには職業、それも重要な職を与えた。1650年にはマザランはプロテスタントの銀行家、バルテレミ・エルバルトを財務担当官に任命した。社交界でのプロテスタントとカトリックの交流はさらに華やかであった。カーンでは同じアカデミーにアブランシュ・ユエ司教、詩人のシャプラン、デュ・ボスク牧師、プロテスタントの東洋学者サミュエル・ボシャールが集った。ソミュールでは、プロテスタントのアカデミーの学長、アミロー牧師が、シャルトルの司教館で夕食を共にした。ニームでは、偉大な文学者ペレズと親交のある東洋学者のサミュエル・プチが多くのさまざまな聖職者たちとよく交流した。[34]

聖職者階級全体が、寛容なこの体制を承認していたわけではない。聖職者大会はますます凶暴になり、1656年の大会では、激しい抗議を彼らの父祖伝来のカトリック信仰に対する「裏切り者」に向けた。一方、改革派教会のルーダン教会会議（大会）は、1659年11月10日、国王の代理の非常に激しい演説で始まり、プロテスタントの怠惰を非難し、この大会が最後ものになるであろうと宣言した。マザランは、1661年3月8日、死亡したが、彼の死によって22才の王はくびきから解放され、彼が国政会議で宣言したように、統治することを望み、首相になりたがり、ユグノーにとっては、きわめて苦難に満ちた時代を開くことになる[35]。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ローマ教会は、サン・ヴァンサン・ド・ポール、サン・フランソワ・ド・サル、ベリュール枢機卿、サン・ジャン・ユゥド、また、多くの優れた平信徒など、敬虔な聖徒と共に、すばらしい信仰の刷新を経験したが、プロテスタントはどうであろうか？　ストロウスキーは「ナント勅令」は「墓碑のように」プロテスタントを閉じ込めたと述べているのは本当だろうか？　レオナールが、この半世紀は、信仰の時代というよりは教会組織の強化の時代であったというのは事実であろうか？　このことを知るためには、ブレモン師の記念碑的な研究[36]に匹敵するような深い研究が必要だとラウゥル・ステファンは反駁し、また、1603年には150だったプロテスタントの教会数が、1626には753にもなっているという重要な事実を挙げ、この事実は牧師や信徒の信仰熱心を示すものではないかと注意を喚起して、そして、プロテ

32）Cf. *Ibid*. p. 149.
33）Jules Mazarin（1602–1662）枢機卿。
34）Cf. R. STEPHAN, *op. cit*., p. 150.
35）Cf. *Ibid*., p. 151.
36）Henri de BREMOND, *Histoire littéraire du Sentiment religieux en France* Tome I–XI, 1967.

スタントの敬虔さを表わす神学の、あるいは文学の作品を挙げている[37]。

ソミュールのアカデミーではカルヴァンの予定論に反対するアルミニアニスムに関して論争がなされた。ソミュールで最も有名な教授の1人、モイーズ・アミローの指導によって、シャラントンでの第3回教会会議において教会の分裂は避けられた。モントーバンのアカデミーはカルヴァンの正統性に強く結びついており、ダニエル・シャミエのような令名高い、優れた教授がいた。彼はカトリックの教義をきわめてよく理解しており、聖書、教父、伝統、歴史に基づいてベラルマンと論戦した。セダンのアカデミーの教授でもあったピエール・デュ・ムランは1621年セダンに亡命し、(当時、セダンはフランスには属していなかった。)『テオフィル、すなわち、神の愛』[38] を書いた。フランス改革派教会には、非常に優れた説教者がいた。ミシェル・ル・フォシュール、ジャン・メェトレェザ[39]らであり、シャルル・ドルランクールの『死に対する慰め』[40] がひろくヨーロッパで読まれ、50版以上出版されていた。ジャン・ダイエは『聖書に基づく信仰』[41] を書いた。また、ピエール・デュ・ボクスやジャン・クロードがいた。ジャン・クロードはシャラントンの最後の牧師であり、『フランス王国において圧迫されているプロテスタントの嘆き』などの著作[42]がある。ジャン・アバディは『キリスト教の真理について』や『イエス・キリストの神性について』を書いた[43]。

優れた詩も作られているが、たとえば、ロラン・ドルランクールの「キリスト教的ソネット」がある。次の3行連句は聖餐式のカルヴァン的観念をよく示している[44]。

あなたご自身が私に与えて下さい。
婚姻の晴れ着を
あなたの聖徒の飾りを、
主の食卓のために
そこには栄光の天使が競って奉仕している。

燃える熱心と喜びの魂をもって
あなたの聖なる体と貴い血によって
私の心に命の芽生えを受けさせてください。

しかし、説教や詩以上に手紙がプロテスタントの敬虔さをよく表している。

II. ナント勅令の廃止

マザランが逝去したとき、ルイ14世[45]、やっと23才であった。王国を統治するのは彼自身であることを国政会議で明白に宣言した。そして、この意図を成就することになる。当時ヨーロッパでは、君主は世俗問題と宗教問題に関してともに統治する権限を有するという理論が広がっていた。カトリックの最高支配者たちはこの理論を好意的に受入れ、また、エリザベス女王やプロテスタントの君主も同様であった。

1678年から1693年にかけて、ルイ14世は教皇イノセント11世と不和であった。空席になった司教職の収入と、また、新しい司教の着任まで司教区の聖職者の任命権はフランス国王に帰するという王の特権を南フランスの諸州に拡大しようとしたからである。ルイ14世がボシュエ[46]の協力を得て、1682年、聖職者大会でガリカン教会の自由を明記した「4カ条宣言」を決議させたとき、この紛争は最悪の状態であった。イノセント11世は、この4ヵ条には全く効力と価値がないこと、この宣言に

37) Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, pp. 151-152.
38) Pierre du MOULIN, *Théophile ou l'Amour divin*, 1609.
39) Jean MESTREZAT.
40) Charles DRELINCOURT, *Consolations contre la Mort*,
41) Jean DAILLE, *La Foi fondée sur les Saintes Ecritures*, 1634.
42) Jean Claude, (1619-1687), *Les Plaintes des Protestants opprimés dans le Royaume de France*, 1686.
43) Jean ABADIE (1654-1724), *Traité de la Vérité de la Religion chrétienne*, 1684. *Traité sur la Divinité de Jésus-Christ*,
44) Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 154.
45) Louis XIV (1638-1715)
46) Jacques Bénigne BOSSUET (1627-1704) フランスの司教、説教家。

同意した高位聖職者には宗教的権限を与えることを拒否する旨、宣言した。教皇が1693年、亡くなった時、35の司教職は正式のものではなかった。ルイ14世は新しい教皇イノセント12世に対しては譲歩し、前の教皇に拒否していたことを与え、暫定的な特権しか握らなかった。

忠実なカトリックであろうとするこの国王は、自らの正統性が疑われないために、すべての分離派、ジャンセニスム、キエチスム、プロテスタンチスムに厳しい態度をとった。しかし、彼の不寛容の最も深い、確かな理由は、彼の絶対主義に求めなければならない。プロテスタントに対して、『覚書』なかで彼がその基本線を描いた術策を用いた。まず第一に、甘言を用い、優遇し、さらに、金銭を用いて、彼らを味方にし、また同時に、教会が固定できた最も狭い範囲に彼らを閉じ込めるよう努めることであった[47]。

幾人かの牧師は一致への道を開こうと努めていた。『教会の再一致』を出版したイザーク・デュイソー、『幾人かの平和的なプロテスタントの手紙』のブルデュである。[48] カトリックの神学者は、とりわけ、この望ましい「一致」のために尽力した。ニコル[49]は『信仰の永続性』、『カルヴィニストに反対する正当な先入見』を出版した。とりわけ、ボシュエは、教義の違いを小さくして、ローマ教会に人々を引きつけるのに力があった『カトリック教理の論述』を出版した。この書物を手書して読んだチュレンヌは、高位聖職者ヴィアレやショアズールと対談のすえ、1668年10月23日、棄教した。この書物は幾人かの人を改宗させ、また、この書物はより協調的な論争に人々を導いている。

1673年に、『宗教改革擁護』を出版したジャン・クロードは、1678年に、ロア伯爵夫人のサロンで、また、チュレンヌの姪、ド・デュラ嬢の臨席のなかで、モーの司教と大議論をしている。おそらく決着のつかないこの議論では、宗教とは使徒以来、父から子へ伝えられる遺産と同一視するカトリック精神と神の言葉を読むことによって、恩寵により触れられた魂の個人的な照明とみなすプロテスタント精神を対立させているのが見られる[50]。

ロッテルダムのピエール・ジュリュー牧師は『宗教の変化に対する予防策』の中で、ボシュエに激しく、皮肉を込めて回答した。同じ年、イエズス会のマンブールは『カルヴィニズムの歴史』を出版した。ベールは、この書を機知をもって批判した。また、ボシュエは8年後に出版することになる『プロテスタント教会の変動史』に取りかかっている。ここでは、ボシュエは、改革派教会に由来する信仰告白の多様性をローマ教会の不動の、完全な教義と対立させている。しかし、ユグノーの論争家たちはあらかじめローマ教会の不動性の主張に答えている。カトリック側でもすべての神学者がボシュエに賛成だったというわけではなかった。イエズス会のペトー神父はカトリック教会の教義の発展を『教義神学』の中で書いている。[51]

要するに、フランスや外国で、若干の改宗が反響を呼んでいるにも拘らず、全般的な、プロテスタントを得るための弁証論的な努力であるボシュエの書物は、和解の試みと同様、大した成果は得られなかった。国王は、その時、彼の祖父が手本を与えたもうひとつ別の手段、つまり、金銭によることを考えついた。フーケの訴訟ののち、恩赦で帰っていたポール・ペリソンは資料編纂官に任命され、カトリックに改宗し、1675年、国王からレガル[52]の収入によって賄われる改宗口座の創設を許された。この改宗口座の開設は、当時の良識ある人々から承認されていた。「当時、改宗が悲惨を引き起こすことはまれではなかった。聖職者たちだけでなく、棄教によって顧客や仕事を失う工芸職人も、商人も、召し使いも、労働者もそうであった。」ボシュエ、ブゥルダルウ、フェヌロンら、

47) Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 160.
48) Cf. *Ibid*, p. 160. Isaac d'Huisseau, *La Réunion du Christianisme*, Du Bourdieu, *Lettre de quelque Protestants pacifique*.
49) Pierre NICOLE, *Perpétuité de la Foi*, 1664. *Les Préjugés légitimes contre les Calvinistes*, 1673.
50) Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, pp. 160–161.
51) Cf. *Ibid*, p. 161.
52) régale

この世紀の優れた大多数の人々が彼の才能と性格を賞賛し、ペリソンの事業を正当化するよう努めている。他方、フランス語の聖典を出版し、これらの改宗を助けるよう試みている。良心的な高位聖職者たちは、幾人かの司祭が満足している性急な改宗を望んでいなかった。

結局、グルノーブルの司教、ル・カミユが1679年に改宗者が4250名あったと自慢しても、改宗口座は失敗であった。ペリソンは教皇に、1682年1月1日以後、50,830人の数字を報告しているが、この数字の中には、ポアトゥの知事マリヤックの暴力による38,500名が入っていると、ジャン・オルシバルは考察している。国王は1679年6月30日、イギリスで、5人のイエズス会会士が処刑されて以来、さらに激しい強権を発動することに傾いていた。しかしながら、マリヤックは、ヨーロッパ全体を憤激させた残酷さでもって軍隊を宿営させた。マリヤック知事は召還され、バビルが交代した。彼はラングドックでと同様、残酷であった。憎むべきドラゴナード[53]を用い、金銭でも、宣伝でも、論争でも実現されなかったものを得るために、ますます執拗にテロ行為を行なった。英国のエリザベス女王が政策によって実行した迫害と、征服した地方に放たれた兵隊たちが不幸な人々に敗北の叫び声を上げさせるために用いた残酷な手段とは比較にならなかった。「殺さずに苦しめるあらゆる拷問をプロテスタントに加えた。」とミシュレーは書いている。殺さないということが兵隊に命じられていたが、当時の兵隊はフランスで起こったことから判断すると、きわめて残忍であった。[54]

暴力を用いている王の政府が協調の試みによって、教会の再一致を実現する希望を失っていなかったというのは、奇妙なことである。国王は再一致が容易に得られると長い間、想像していたようである。オーベール・ド・ラ・ヴェルセとかジャン・デュ・ブールデュのようなユグノーの「協調者」の文書は国王がそのような意見を持っていたことをよく示している。

1685年5月、聖職者大会において、若干の司祭の間には、和解的な動きがあったが、教皇は怒り、ルイ14世は厳しい弾圧の手段を再びとった。とりわけ、レェゲンスブルグの講和（1684）が彼に20年間の休戦を保証した時、軍隊の動員が自由になったので、彼はそれを異端者を減少させるために用いた。1685年10月18日、高ラングドック地方では、すでに38のプロテスタントの教会堂が閉鎖され、地方教会会議の財産はカトリックの病院に与えられていた。1685年1月、許可されている教会は、1/12か1/15しか残っていなかった。ポアトゥ地方では、80あった教会堂が15になっていた。同年6月、ルアンの議会は、ノルマンディのすべてのプロテスタントの教会堂を破壊することを命じた。フーコー知事はマリヤックの手段を採用して、ベアルン地方で、数週間で2万2千名の改宗者を得た。ラングドック地方では、人情味のあるダゲッソーは更迭され、新任のバヴィルは同様の手段で、同様の成果を得た。

暴力によって引き出された改宗とはどのようなものであったのだろうか。1678年、オランダで『シャンブラン・ド・ピネトンの涙』によって、引き出された「私はカトリックに戻ります」という言葉を良心に反して、不幸な人々が発した時の、肉体的苦痛に加えて、精神的苦痛がどのようなものであったかを描いている。[55]

オルシバル教授は、ルイ14世は元来、残忍ではなかったが、家臣が彼の宗教と異なる宗教を持つことを認めなかったと考えている絶対君主に対する節度のない諂いが横行し、彼のうちに徐々に彼の王国において統合を実現しようという「大計画」が形成されてきた。ドラゴナードが画期的な成功を収めたのを見て、彼は1681年以来、暴力の道を強行した。そして、レェゲンス講和によって彼の栄光が絶頂になった時、1685年1月最後のプロテスタントが彼に差し出した苦悩に満ちた要求を少しも顧慮せずに、「ナント勅令」の廃止を計画した。もはやプロテスタントはいない、また、「ナント勅令」は存在理由を持たないと宣言して、問

53）dragonade, ルイ14世治下、プロテスタントを迫害するために用いられた手段。国王軍の竜騎兵を駐屯させて、改宗を迫った。ポアトゥー、ベアルン、プロヴァンス、ラングドック地方などで激しかった。

54）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, pp. 162–163.

55）Cf. *Ibid.*, p. 163.

題を回避した。[56]

この政策の大責任者は誰か？過去の歴史家は重い責任をマントノン夫人[57]とド・ラ・シェーズ神父[58]に帰している。侯爵夫人は「もしも神が王をお守りになるなら、20年後にはユグノーは一人もいないでしょう。」と1679年に書いた。そして、その後、彼女の兄弟に、「今、プロテスタントの土地を買う時です。それはただみたいなものです。」と勧めている。しかし、この問題を子細に研究した碩学マルセル・パンは「彼女のどの手紙も『ナント勅令』の廃止について意見を述べていない。」そして、1685年には「彼女の同時代人の誰も、この廃止を引き起こしたといって彼女を非難してはいない。」と指摘している。彼は彼女がこの問題に関しては何の役割も果していないと結論している。[59] オルシバル教授もマルセル・パンと同意見である。[60]『ドォマル嬢の手記』や『ランゲ・ド・ジェルジの覚書』を引用して、侯爵夫人はいつも「相手のルゥヴォアの野蛮な手段を責めていた。」王自身も、ある日、「奥方、あなたのお話には私は心を痛めます。あなたの昔の宗教の名残りがあるからではないかと私は心配しています。」と言っている。しかしながら、マントノン夫人はプロテスタントを熱心に改宗させたが、彼女は優しく彼らを誘いたいと思っていたようである。[61]

ラ・シェーズ神父の役割はもっと地味だったように思える。ジョルジュ・ギットン神父はジュリュウの重要なテキストを引用して明確にそれを示している。[62] 要するに、「神と教会に反抗する者は主権の拘束を揺さぶる」と確信して、彼の王国の統一を頑強に樹立することに熱心だったルイ14世は、彼が絶えず、侵食し、侵してきたこの勅令を廃止するにいたるには、何の励ましも必要ではなかった。しかしながら、とくに、彼は年老いたル・テリエ枢機卿の意見を聴いた。ル・テリエ枢機卿は（ドーフィネ県出身）暴動の危険と商業を破滅にするさらに大きな移民が起こる可能性を主張したが、国王はこの反論を過小評価し、1685年10月18日、「フォンテーヌブロー勅令」に署名し、この勅令は10月22日議会に登録された[63]。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ナント勅令」の廃止は、フランスでは、悲しいことに、歓喜の声で迎えられた。議会は承認した。フランス・アラデミーは勝利を賞賛した。フォントネル、セヴィニエ夫人、ラ・フォンテーヌ、ランセ、ロラン、ラ・ブリュイエールが褒めそやした。ル・テリエの追悼演説におけるボシュエの賞賛も忘れることができない。ヴォヴァン、サン・シモンら少数の知識人は、「フォンテーヌブローの勅令」を認めなかった。幾人かの司祭は、廃止後も繰り返される暴力に憤激した。当時の記録によると、小市民階級や民衆は「フォンテーヌブロー勅令」を喜んで受け入れた。プロテスタント教会堂は破壊された。ギゾは指摘する。「しばしば、主要な張本人は民衆自身であった。歴史を汚したむごたらしい加害のなかで彼らの主人よりも先んじ、そして、主人たちをけしかけたのは、民衆であった。だから、後世の正しい評価を受けなければならないのは、指導者も民衆も同様である。」と。[64] ダニエル・ロップスは「フランスは不寛容が制度化されている国と同じ地位に落ちた。」と指摘している。「ナント勅令」の廃止は「とんでもない過失」であるだけでなく、「良心に対する犯罪」であると彼は言う。[65]

実際、「とんでもない過失」となった。憤激したヨーロッパはルイ14世に対抗して同盟を結ぶことになり、そして、孤立してフランスは悲惨な戦争の恐怖を知るようになる。2つのプロテスタント

56）Cf. *Ibid.*, pp. 163–164.
57）Françoise d'AUBINGE, marquise de MAINTENON（1635–1719）
58）François d'Aix de La Chaise（1624–1709）
59）Marce PIN, *Mme de Maintenon et les Protestants*, 1936, p. 74, p. 77.
60）Jean ORCIBAL, *Louis XIV et les Protestants*, p. 92.
61）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 164.
62）Le P. George GUITTON, *Le P. de La CHAIESE*, 1959, t. I, p. 259 *sq.*
63）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 165.
64）*Histoire de France*, Ⅲ, p. 295.
65）Cf. *L'Eglise des Temps classiques*, pp. 242–244.

の強国、大英帝国とプロシャは並みはずれて強大になり、そして、ともに「尊大なフランス」に敵対する同盟組織を創ることになる。これらの国が強化される間、フランスはその血液を失なっていた。20万から50万のプロテスタント、おそらくは、それ以上（デュフールは80万人と思っている。）の兵隊、水兵、行政官、学者、商工業者を失なった。「ヴォーバンは9万人の水兵、1万2千名の兵隊、6百名の将校が最も栄えている手工業や6千万枚の鋳造された銀貨と共に外国に移ったと推測している。」牧師だけがただちに、7才以上の子供を残して祖国を去らねばならなかった。レオナールは、牧師のうち、⅓が改宗し、⅔が亡命したと見積もっている。棄教を望まない大貴族は王国を去ることも許された。ラ・フォルス侯爵、ションベール元帥、ド・リュヴィニ侯爵夫人、デュプレシ・モルネの子孫、チュレンヌの姉妹、ラ・ヌーの子孫らはフランスを去った[66]。

ダニエル・ロップスはルイ14世の政策を批評し、この移住の悲惨さを次のように強調している。「恐ろしい逃亡、苦難に満ちた出国、すべては今日、私たちが十分に知っているものに似ている。小舟で、オーニやブルターニュの海岸から、嵐のなかを脱出した。真冬、アルプスやジュラの最も険しい道を通って逃亡した。これらの逃亡者のうち、何人死んだであろうか？警察に逮捕された者は、ガレー船に送られた。最も幸福な者は、その場で殺された者であった。」そして、彼はつけ加えている。この移住者たちは「移住先の国ではまだ知られていなかったフランスの技術を持って行った。」技術と、また、農作物を、たとえば、ドイツにあざみを、ケープタウンにぶどう畑とオリーブの木をもたらしたと述べている。[67] フランス人の知能と器用さが外国を豊かにした。ピエール・ベール（1647–1706）は、ヴォルテールや百科全書家たちが十分にその恩恵にあづかった有名な『辞書』を出版する。ドゥニ・パパンはマールブルクに亡命し、1707年、最初の蒸気機関を発明した。[68]

寛大な知識人たちは、2つの信仰告白の和解できる日を夢見た。この事に1680年以来、努力してきた大哲学者、ライプニッツは1692年から1702年にかけて、ボシュエと心を揺り動かす文通をした。しかし、ついに2人は信仰と教会に関するローマの見解とプロテスタントの見解は相容れないことを知った。ライプニッツは対話を止めた。[69]

主要参考文献

Raoul STEPHAN, *Histoire du Protestantisme français*. Librairie Arthème Fayard, 1961.

Jean ORCIBAL, *Louis XIV et les Protestants*, Vrin, 1951.

Emile–G. LEONARD, *Histoire générale du Protestantisme*, tome II, P. U. F. 1961. Le Protestant français au XVIIe Siècle, *Revue historique*, 1948.

Samuel MOURS, *Le Protestantisme en France au XVIIe Siècle*, Librairie protestante, 1667.

Janine GARRISSON, *L'Edit de Nantes et sa Révocation*, Seuil, 1985.

ELisabèthe LABROUSSE, *La L'Edit de Nantes*, Labor et Fides, 1985.

Daniel ROBERT, 《Louis XIV et les Protestants》, *XVIIe Siècle*, Nos 76–77, 1867.

Le Bulletin de la Société de l'Histoire du Protestantisme français, 1985.

P. PUAUX ET SABATIER, *Etudes sur la Révocation de l'Edit de Nantes*, 1886.

Georges GERR, *Henri ROHAN*, 1946.

M M. HAAG, *La France protestante*, Paris, 1846, 1859.

Archives Nationales, *LES HUGUENOTS*, 1985.

66）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 166.

67）Cf. Daniel–Rops, *L'Eglise des Temps classiques*, p. 244.

68）Cf. R. STEPHAN, *op. cit.*, p. 167.

69）Cf. *ibid.*, p. 167.

The History of the French Reformed Church under the Persecutions (1)

—From the Edict of Nantes to the Revocation—

ABSTRACT

After the battles against the Catholic Church, Henri de Navarre, protestant leader and king of Navarre, converted to Catholicism, became King of France as Henri IV, and endeavored to establish a system of co-existence between the Catholic and Reformed Churches. He promulgated the Edict of Nantes in 1598 and made sincere and eager efforts to assure the religious liberty of Protestants. After the unfortunate assassination of the King in 1610, persecutions steadily intensified under the reign of Louis XIII, and during Marie Medicis, Cardinal Richelieu and Mazarin's control of power. Finally, Louis XIV, with the desire for only one religion in his kingdom, the Catholic Church, retracted the Edict of Nantes, banished some Protestants to foreign countries, and forced others to convert to Catholicism. After this revocation of the Edict, the King thought that Protestants did not exist any longer in his kingdom, but not a few Protestants maintained their service to God in secret assemblies. Unique and surprising religious resistantces developped from these gatherings.

Key Words : Two confessions of the faith, protestantism, catholicism